

1995-24-013

「戦後の五十年を私たちが生きてきたのか。私たちは「戦後」から何を継いでいくべきなのか。鶴見俊輔さんの話を聞きながら考えてみたい。聞き手は社会学者、橋爪大三郎さんと地域誌編集者、森まゆみさんである。

△上▽

鶴見俊輔さんを囲んで

「戦後」を語る



鶴見 俊輔 哲学者、評論家。1922年東京都生まれ。父親は政治家の鶴見祐輔。42年ハーバード大哲学科卒。46年「思想の科学」創刊に参加。京大助教授、東工大助教授、同志社大教授を歴任。65年に小田実氏、高島通敏氏らとベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)を結成。著書に「鶴見俊輔集」(全12巻)など。

鶴見俊輔さん 私は「不良少年」だった。小学校を三回変わって、中学校を三回出された。森まゆみさん どうして「不良少年」になったんですか。鶴見 オフクロが、これはもうすごいオフクロで、ゼロ歳のときから、もうキョウキョウ言わされた。四歳くらいになると朝、お菓子の盗み食いをする。ゴッフルです。今もあるでしょう。それを見つけたオフクロは四歳の子ども相手に、もう声涙ともに大なる演説をするわけですよ。あなたがこんなに悪い子なのは私の責任だ。私はあなたを殺して死にます、というんだ。四歳児がそんなこといわれたら、どうなる？ 兄弟が四人いるけれど、私以外は母親に屈してしまっ。

森 母親の力は本当にすごい(笑)。最初に出会う鶴見。鶴見 でも私はどうも遺伝子にそれが組み込まれていたのか、もう「死しても屈せず」で母親に反抗した。このオフクロとの体験は私に大切なことを教えてくれた。軍国主義が出てきたときに、これがかたちとしてはつきり分かった。道徳的な正しさと権力を一緒に持っている。その後の共産主義もスターリンも同じ。まさにオフクロがワーツとのしかかってくる感じなんですね。だから直観的にそっちに行かなかった。ともかくそんな反抗の末、アメリカに追いやるわけですね。橋爪大三郎さん 日本には一九四二年の捕虜交換船で帰って

来られたわけですね。鶴見 日本に帰るかアメリカに残るか選択があったんです。私は、日本が負けるときに日本にいたい、負ける側にいたい、そう思ったんです。この感情はいま考えると合理的じゃないんですけど。八月二十日に帰ってきて、役所に届けに行ったら、東京都最後の徴兵検査に間に



橋爪大三郎 1948年、神奈川県生まれ。東大教授(社会学)。著書に「冒険としての社会学」など。

身につかない感じがあった

身につかない感じがあった。鶴見 日本に帰るかアメリカに残るか選択があったんです。私は、日本が負けるときに日本にいたい、負ける側にいたい、そう思ったんです。この感情はいま考えると合理的じゃないんですけど。八月二十日に帰ってきて、役所に届けに行ったら、東京都最後の徴兵検査に間に

橋爪 お話を聞いていて、改めて鶴見さんは日本人の平均的あり方からすれば、かなり特異な経歴をお持ちだと思います。敗戦後の時代を、戦後知識人と呼ばれる人々がリードしたわけですけど、それは戦後民主主義を含めて、GHQお仕着せの知識や情報にのっかってた。それに対して、全く違ったかたちで海外の現実を知っておられる人々もいた。鶴見さんもそういう数少ない一人だったわけ、日本の戦後の現実についても同時代の日本人とは違った見方をしていたのではないかと

鶴見 天皇の戦争責任についての論議がありますね。私は結論的には責任があると思っていますが、ただ、「天皇には戦争

憲法は一片の紙切れじゃないんだ

鶴見 シロタ(草稿執筆メンバーの一人)が最初に書いたものを残しているけれど、そこにAll Natural Persons とあるんですね。こんなムチャな考えは二十世紀の法律用語にはないんで、自然法だよね。アルトリアスからホップズ、ルンを経てシェフアンンまで流れ



森 まゆみ 1954年、東京都生まれ。地域誌「谷中根津千駄木」の編集者。著書に「小さな町づくり」と「親走」とり

女性は案外元気だった、と思う

責任あり」といって大上段に刀をふりかざしたときに、両方の腕が上がっているから、わきにスキができるんですね。そこを見えない手によってたたかれていたのだが、見えない手でも、それが問題なんだ。そのこ

鶴見 鶴見さんのお話の根底には、憲法のあるべき姿についての一つのイメージがあると思います。まず言葉を自在に使える自立した個人がいて、その個人と個人が関係を作るうえで、やはり法律や憲法が必要だと考え、確かに一枚の紙切れだけれど、納得するまで約束を交わす。これが憲法のあるべき姿なのではないかと。

鶴見 シロタ(草稿執筆メンバーの一人)が最初に書いたものを残しているけれど、そこにAll Natural Persons とあるんですね。こんなムチャな考えは二十世紀の法律用語にはないんで、自然法だよね。アルトリアスからホップズ、ルンを経てシェフアンンまで流れ

鶴見 集団としては、いなかっただ。個人としてはいました。森 戦後といえやはり新憲法ということがなるのですが、私たちは憲法を学校で習いまして、橋爪さんもそうだと思いますが、鶴見さんの場合はどうだったのですか。

鶴見 私は「不良少年」出身でアメリカに行ったら(笑)、最初に暗記して自在に使えるようになった憲法はアメリカの憲法なんです。日本の憲法は後になって読んだ。あの憲法はアメリカが草稿を作ったわけですが、あの中にはフーバーの失政の後、なぜルーズベルトのニューディールが出てきたのが海面下の氷山のように隠れている。アメリカはあの時代に非常に苦んで、ヒトラーの方向に行かない道を見つけた。これは偉大なことなんだ。それがあの憲法の背後にはある。一片の紙に書かれた記号じゃないんだ。

森 まゆみ 1954年、東京都生まれ。地域誌「谷中根津千駄木」の編集者。著書に「小さな町づくり」と「親走」とり

橋爪 日本では、明治憲法はもうろん新憲法でも、そういう感覚が希薄だったと思います。

森 新聞連載で読んだ記憶はありませんが、夏に海の家に行くと、単行本になっているのを読みました。女は強い。しかし相変わらず家の中でだけ生きていてつまらないと感じました。鶴見 戦後の漫画でなぜ「サザエさん」が一人横綱になったかという問題は面白いと思いませんか。戦中に女性は何人として活躍しなければならなかったわけで、そこで残された女性の力と関係あるんじゃないかというのが私の解釈なんです。

鶴見 明治憲法の「前文」として読み取れるものは、たぶん坂本龍馬が後藤象二郎に示した「船中八策」といったものがある。もしこれが「前文」として盛り込まれていたら、これは素晴らしいものになるでしょう。中江兆民は、それができた人だった。彼にとっては明治憲法の条文は単なる記号じゃないかなって思ってます。だから、明治憲法を擁護した。美濃部達吉も明治憲法を読み込んで「天皇機関説」をうたった。つまり、憲法は一片の紙切れじゃないんで、だれがどう読むかということが大切なんです。

森 戦前から戦後の急激な変化があった時代、女性はどうだったんでしょか。家外と虚脱していなかっただけじゃないかと思うんです。元気だったんじゃないかと。

鶴見 そうですよ。つまり女性も晩飯を用意しなければいけなかったから。八月十五日にもう晩飯は食べないようしようとした女性はいなかったでしょう。そのことには憲法の前文のように意味があるんだ。初めに歩いた。歩いた後から道ができる。それが憲法なんだ。法なんてものもそういうものなんだよ。

女性といえ、戦後、漫画が復活した時に、突如として長谷川町子さんの「サザエさん」が登場して、横綱を張りますね。断然一人横綱です。最初は福岡の「フクニ子新聞」に連載されていて、まもなく朝日新聞に移りました。

森 新聞連載で読んだ記憶はありませんが、夏に海の家に行くと、単行本になっているのを読みました。女は強い。しかし相変わらず家の中でだけ生きていてつまらないと感じました。鶴見 戦後の漫画でなぜ「サザエさん」が一人横綱になったかという問題は面白いと思いませんか。戦中に女性は何人として活躍しなければならなかったわけで、そこで残された女性の力と関係あるんじゃないかというのが私の解釈なんです。

# 戦後を語る

〈中〉

## 鶴見俊輔さんを囲んで

橋爪大三郎さん 鶴見さんがとっていた独自のスタンスは、戦後の知識人の間ではいろいろなと誤解されたのではないかと思っています。

鶴見俊輔さん へ平連(へつら)ナムに平和を！市民連合)なんかをやっていますから、非常に困るのですが、その正義の人と間違えられないんですよ。本当は私は決して「正義の人」ではない、内心のすざい葛藤を起している。気も狂わんばかりだったので。でも、小田実はそのような感じではないかと思う。

へ平連そのものは、私がアラジンの魔法のランプのコレクを抜いたら中から巨人が現れたよ

鶴見 それもありですが、悪人は公開の席上で善人めいた話をしてはいけないんですよ。自分のした悪事についての懺悔もしてはならない。それを自分の中に記憶として残す、それが悪人の力なんです。

## 脱走兵援助は愉快だった

橋爪 戦後五十年の間に鶴見さんがされた、これだという大きなことを何回ですか。

鶴見 へ平連から付随して出てきた米軍の脱走兵援助ですね。

私は戦争中に帰国して、「しまった、どして帰ってきてしまったのか」と後悔しました。志願してドイツ語通訳になったんですが、いつか脱走したいと思っていた。パタゴニア在動海軍武官府だったので、脱走してカンボン(村)まで逃げれば数日はかかるといわれるかもしれない。でも結局は陸軍地区ですから憲兵に捕まって殴られて重傷(重傷)で死んでしまった。

逃げた覚悟はなかった。同室の人が捕虜を殺せと命令されたので、私も来るかもしれないと思っただけで、幸い私には命令がなかった。もし命令が来たらどうしたかわかりません。

そういうことがあって、へ平連の時、米軍の脱走兵に出会ったんです。国家から人殺しを要求された時に、その国家のやっている戦争が間違っていると考えたら、そこから逃げる、私はそう思った。現に今、脱走し

うなものです。私が小田実に頼んだら、あっという間にどんどん広がった。毎日いくつものくとも全国にへ平連ができていった。そうすると、全部に小田が出て演説するわけにはいかなかった。私も行くしかない。ところが私は演説は好きじゃないんですよ。だから、もう自殺したい心境だった(笑)。

森まゆみさん 同じことを何度も話さなければならぬからですか。

鶴見 それもありですが、悪人は公開の席上で善人めいた話をしてはいけないんですよ。自分のした悪事についての懺悔もしてはならない。それを自分の中に記憶として残す、それが悪人の力なんです。

へ平連は私の悪人の部分に場所を与えてくれなかったんです。与えてくれたのが脱走兵援助でした。脱走兵は大体が不良少年です。だから、私は響き合えるところがあつたんです。

森(自宅に泊めて同じ釜の飯を食べたわけですか) 鶴見 私が自宅に泊めていたのは日本人の脱走兵一人でした。凄惨な男で、兵隊に行けば特典があつたので学校に行けると思っていました。当時大使はライシャワーでしたが、彼は私の留学時代の日本語の教師で私のことを知っている。何度も大使館の宴会に呼ばれたけれど、私は応じなかった。ライシャワーの部下がもし私の家に踏み込んだら私は彼らの足ぐらひはつかんで抵抗しようと思つていました。それが新聞に載ればアメリカ大使にとっては不利、私にとっては有利だ



橋爪大三郎さん 森まゆみさん 鶴見俊輔さん

と予想したんですが、彼も不利だと知って踏み込まなかった。彼は相当向かって腹を立ててしまったね。そりゃ私も彼の立場だったら怒りますよ(笑)。

森 ライシャワーさんにとっては鶴見さんは本当の悪人だったわけですね。

鶴見 彼の回顧録にも私のことばあまりよく書いてない。

橋爪 鶴見さんの父君の鶴見祐輔さんは有名な政治家でしたが、政治家というのは正義を体現しなければならぬ立場ですね。私が鶴見さんの話を聞いて

て強烈に感じるの、悪人と自己規定して、正義についてのアンビバレントな感覚を持っておられることです。正義を担えば必ず虚偽になるといふ、大きな公理を持つておられる気がします。それは鶴見さんの個人史としてはよく分かりますが、私が興味を持つのは、日本の戦後の知識人で、自分の資格で堂々と正義を担う人があまりに少ないことです。軍国主義やスターリニズムの権威をかさに着て正義づらする人は、掃いて捨てるほどいましたが、それ以外の人の

鶴見 いらないですよ、そういう人は、ごく少数しか。

橋爪 正義を担う用意がないのに正義を語っているのが、全共闘の弱点だった。

鶴見 私は、当時は全共闘内部の人の気分がよく分からなかったんですが、それが今回読んで橋爪さんの著書で手がかりをつかんだ気がしました。例えば『冒険としての社会科学』にある「全共闘の人々」として一番難しいのは正常化によって戻った秩序をどう受け入れるかだった」といふ一文ですが、全共闘の問題、難関をよく表していると思う。

橋爪 私が学生の時に感じたのは、戦後の知識人たちがどうも私たちがだまされてきたんじゃないか、という事です。大学の教壇に立ち革命のごとマルクス主義のごと、民主主義の尊いことを教えていたけれども、それは飯のたねにしているにすぎなくて(笑)、いざ、足元が濡かされたときに、彼らは何もできないじゃないか。非常に早口に言えはさういふことだったと思います。彼らが言っていることがどこまで信用できるのか一度確かめた、また自分たちが教わったことがどこまで身になっていくのか確かめた。そのためには、教室の外に出なければと思ったんです。

場合、正義を自分で背負うんだというスタンスを取ることには非常に不得手だったのでではないでしょうか。例えば、全共闘は抗議の声を上げて一応正義の立場には立ちましたが、その正義はとどこん肯定できる正義なのか、仮に全共闘が武力闘争で勝って大学を占拠し、どこでも大学を管理運営していく立場になった場合、そこまでの用意があったのか、という所が問題になると思うんです。

## 高度成長が「親問題」を消した

鶴見 橋爪さんが「大問題」という本で「大学が今できる」とは入試をなくすことだ、会社ができることは新卒採用をやめて中途採用にすることだ」と提案したことに感心しました。

私は、自分自身や自分の日常生活から出てくる問題について、「親問題」「最初問題」と

五年からはじまったんだけれど、その高度成長が親問題を消していく。江戸時代から明治維新に至るまで親問題は生きていて、日戦戦争の終わりを勝利と言いつつ、あれから、あれこそ勝利ではなく終戦だったんです。親問題を消去する教育になってきたんです。しかし、それ以上に、五五年以降の消去の仕方はすさまじかった。

明治国家の無理がツケとしてたまる

森 私は五四年の生まれです。大闘争にはすべて遅れ、〇×式教育の中で問題を見失っていたような気がします。

橋爪 戦前も聖戦であるとか、イデオロギーを振り回して親問題を消去したと思いが、親問題を消去を今の読者に分りやすいことばで言えばマインドコントロールでしょう。鶴見 そうですね。それも親問題を消去する方法です。

橋爪 戦前は虚構の現実を振り回して人々の日常生活を圧倒して戦争に動員した。戦後はそれをひっくり返した所からはじまったのに、やはりもう一度、マインドコントロールがいろんな形で始まった。マルクス主義も、戦後民主主義も、企業社会もそうかもしれない。そのうちの中にも巻き込まれていく、それがオウムまでつなげていくのではないだろうか。

森 戦後だと男女平等になったのはいいけれど、女性まで受験競争に巻き込まれて、生活に根ざすことを忘れてしまったのではないだろうか。

鶴見 そうですか。でも女性は食事の用意の手伝いなんかしてたんじゃないですか。そこに目を付けるのは大事なことだと思えます。

橋爪 親問題を言い換えて日本のルーツと言ってもいいでしょう。明治維新の課題は、当時の国際社会と互角に渡りあえる国家づくりで、それを鶴見さんの現況から立ち上げなければならぬ。そういう明治国家の無理が、昭和から現在へのツケとしてたまっている。

鶴見 系統発生としての親問題はそうでしょう。明治以前の社会から欧米とぶつかった時に起るミンですね。でも私が言いたいのはあくまでも個体発生の中でぶつかる親問題のことなんです。



1995-24③/3

# 戦後を語る

〈下〉

## 鶴見俊輔さんを囲んで

森まゆみさん 私は戦後の記憶では十歳の東京オリンピックの印象が強いです。四つんばいの時に街頭テレビを見て、そのあと川が流れて、高速度路ができ、新幹線ができたのが東京オリンピックの時でした。そのころまでは進歩と発展する未来とかを信じていたんですが、大阪万博はいやになってしまったんです。こんな苦力デカしたキラキラしたものを作ってもちっとも楽しくない。必要に豪華なだけ。それと覚えておいてほしいのが生まれるたびにお祝いが派手になってきたことですね。



▲鶴見俊輔さん

鶴見俊輔さん 面白いなあ。それが高度成長だったんですね。昔は逆に下の子ほど地味になるものだった。

橋爪大三郎さん 私は小学三年まで関西に住んでいて、山も近くあって毎日遊んでいたら、東京に引っ越したらアスファルトしかない。遊べないなあという喪失感を感じました。

た。その後、中学から高校に進んでいくプロセスと、高度成長・東京の姿貌が重なっている。大学に入って紛争という闘争になったんですが、そこまではトレートにつながっている気がします。

森 私が大学に入ったころは学生運動も大体、終わったあとで、大闘争は何もなかった。

か。って言われる。そこで日本のビジネスマンは、「いや知りませんで、教科書に出ていなかった」とびびります。今度は韓国に行くと同じように取引をし、韓国料理を食べ、酒が回って、「日本の憲兵が水原で教会に女子供老人を入れ、火をつけて全員焼き殺したのを知っていますか」。

## 高度成長とともに育った



▲森まゆみさん

森 日本の戦争責任の問題はどうですか。

鶴見 簡単に片付かないでしょうね。橋爪さんが著書で言っているように、さまざまの立場の人が死んだというところを率直に認めることが必要です。反戦思想を持っていくかどうかではない。死んだ人間すべてに対して脱帽する。日本人と非日本人を問わず。その視点をゆくり作り出していく。そしてアメリカに依存しない、日本人なりに人類の視野に向かっていくことが必要ですね。

森 本は周辺諸国の何千万人の人を殺害した、そして広島、長崎も含めて大勢の死者を出した。そのことをどう抱きとめ続けられるか。それは一九四五年の終戦までの死者だけではなく、例えば明治維新の死者についても同じだと思うんです。そういう過去を過去としてしっかり語れる日本語を我々が豊かに持つことが、あらゆる問題の出発点だと思うんですが、戦後はそれが空回りしていたのではないのでしょうか。どうしたらいいと思いませんか。

## 「親指の物差し」が大切だと思う

橋爪 それよりもっと下の世代、三十歳からそれ以下の人たちには、また違った体験をしたでしょう。オウムのような社会現象もあります。これからは日本は変化していくと思いますが、国際社会にすんなり受け入れられる方向に変化できるのだろうか、少し心配もあります。このあたりはどうかお考えですか。

鶴見 敗戦後というだけでなく、高度成長が日本が今まで全く経験しなかったことでした。世界で最も豊かな社会になるなんて夢にも考えなかった。私がアメリカに行ったときに「おかし」という日本語を訳せなくて困ったんですが、今では「おかし」の概念が日本でも消滅してしまっただけで、日本人も違わない人間になるでしょうね。

森 例えば片道二時間かけて通っている人がいたら、一日に四時間も通勤に使うわけですが、やはりこれまでは違う人間の間ができていくのではないですか。

橋爪 高度成長や情報化によって人間がいろいろ変わっていきませんが、これは仕方ないことです。テレビが出現すれば当然その影響がある。マルチメディアが発達したらメディア環境だって様変わりでしょう。しかし、もう一方で変わらない連続性の部分がある。タテ糸のようにつながっていると思う。日本社会を日本社会たらしめているもの、日本にこだわらなくてもいいのですが、過去の良いものを未来につなげていく、これがあれば安心できるというものが戦後社会にはあるのでしょうか。

鶴見 橋爪さんの言い方を借りると、天皇制共同社会、これが明治から今日まで貫通してきて、それによって日本が戦争をし、負けた後にもう一度復興して経済大国になった。その強さを見抜けなかったところに大正モダニズム、そしてまた戦後のマルクス主義の欠陥があったん

です。しかし、戦中の「近代の超克」のような仕方では前に進めたいと思います。

それではどうしたら前に進めるか。日本が置かれている位相、地政学の問題としてですが、隣の韓国はもはや戦前の韓国ではないし、台湾もシンガポールも香港もそう。昔のように貧乏人じゃないわけだから、舷舷相摩すということになる。取引しなければいけないし、取引は相互的でなければいけない。そうすると、シンガポールに行くと取引するときに、中華料理を食べに行くと、お酒も入って打ち解けた時に、相手に「日本軍が五千人の華僑を女子供を含めて殺したのを知っていますか」



▲橋爪大三郎さん

鶴見 日本人のカネヲ。取引がその扉を開くのではないのでしょうか。外国との取引していくうちに変わっていくと思いませんか。長い間に、森 外国と経済的に交渉しなければならぬという、歴史を深く振り返るチャンスがあるとおっしゃいましたが、日本から外に出られない人間や地域に縛りつけられている人間はどうしたらいいのでしょうか。

鶴見 人間は自分の中に大宇宙を持っている。それが森さんたちの地域誌「谷中根津千駄木」ではないですか。子供を自転車に乗せて歩いて子供に川の蛇行を教えられたり、子供の目が加わって地域の地図ができてくる。それが世界に通じているんですよ。林子平(江戸時代の経世家)ではないですが、江戸湾の水は世界に通じている。

橋爪さんが「性愛論」で、フェミニズムは女性を階級と位置づけて差別に対して闘っていくのか、そうではなくてあらゆる社会問題に女性としてかわっていく道を選ぶのか、と問題を出しています。森さんの「谷中根津千駄木」は、その後の方の道を取っている。道はずでなくているのだから、安心していい(笑)。

森 そう言われると、なんかホッとします(笑)。

鶴見 でも、森さんの経歴を考えると、よく活動家にならなかつたなと思います。森 子供が三人も生まれちゃったからかもしれませんね。おむつを取り換えたりするのに忙しくて(笑)。

鶴見 偶然ですね。私が日本に帰ってきたのも今考えれば偶然でした。私が戦中派の遺産として保っているのは、「自分の親指の物差し」です。自分の親指(の幅)でどうやって、ケーブルの縁に親指をあてる仕事をしながら、長さを測る、そして自分のおしの立方体としての大きさで体積を測る。戦中派は自分のリュックに本を詰められませんでしたから、本から引用することができない。これは先ほども言った、自分固有の問題、自分の日常の中から出てくる「親指問題」も関係しますね。「人類普遍の問題」を先に立てるのではなく、いつも自分の日常から出てくる「親指問題」から繰り返して出発することが必要だと思えます。

## 過去を語る日本語、豊かに持っているか